柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話：070-1503-6401/044-988-0004
http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo
第 197 号

古老は語る
宮野薫さんのお話 4

岡上の人々と戦争（その４）

（聞き手、筆録、コメント＝小関 和弘(柿生郷土史料館専門委員)）

＊（登戸研究所への）挺身隊に徴用された人から聞いた話。行ったうちの一人は鳥海角江（とりうみすみえ）さん。鳥海輝治さんのお姉さん。

給料は外より良かったとのこと。同級生だったと思うが、梶スミヨさんも登戸研究所へ行ったんじゃないかな。もう一人、後から挺身隊で行った人が居たけれど、その人は悲観して（岡上近傍の）小田急線で死んじゃった。登戸では風船爆弾なんかも作ってたんだって言うけど、「研究所」っていうのは知っていたものの、何をやっているところかは知らなかったそうだ。

・登戸研究所は 1919（大正８）年に陸軍火薬研究所を改編して東京市小石川区に設立された陸軍科学研究所を前身とする。37（昭和 12）年に登戸へ移転し 39 年に「登戸出張所」と改称。最終的に「第九陸軍技術研究所」となったが、その存在の秘匿が目指された。敷地面積約 35 万㎡、敗戦直前には長野、北陸などへ疎開した。軍人、軍属、雇員を含め約 1,000 人が勤務し、紙幣偽造、風船爆弾製造のほか、殺人電波兵器、秘密インク、毒物や微生物兵器など、謀略戦、諜報戦用器材の研究開発を行っていた。スパイ学校だった陸軍中野学校とも密接な関係をもち、中国大陸で細菌戦などを実施した 731 部隊とのつながりもあった。

登戸研究所関連史跡
「倉庫跡（通称「弾薬庫」）」

第 2 科第 1 班班長だった技術少佐（敗戦時）伴繁雄氏は研究所の活動について、「新毒物の性能（毒力）決定、すなわち人体での実験」のために 41 年に南京出張をしたことなども記し、「謀略兵器に関する研究で、非人道的な恐るべきものがあった」と遺著『陸軍登戸研究所の真実』（芙蓉書房出版、2001 年）に記している。

・『特別講座「戦中・戦後の岡上を語り継ごう！」記録集』（麻生市民館岡上分館、2010 年）には「総務課（そうむか）の兵器班」で職員の衣服の製造に従事した薙沢（なぎさわ）（旧姓鳥海）角江（すみえ）さん（1923 年生まれ）の証言がある。44（昭和 19）年 1 月に登戸研究所に入り、厳しい守秘義務のなかだったが、風船爆弾や偽札製造の話は聞いていたと語っている。

座談のなかでは、登戸研に勤める子弟の家に憲兵が突然訪れ、「○○さんは登戸で何をしているか？」と問うことがあったとの話も出た。質問にまともに答えると守秘義務違反で処罰される可能性があると考え、知らぬ存ぜぬの対応をして事なきを得たという。

登戸研究所跡（現・明治大学生田キャンパス）に残る陸軍の五芒星がついた消火栓

・第 2 科に勤務し、自らがタイプした業務関連書類の副本などを綴った 920 ページ余の『雑書綴』を保存し続けて、登戸研究所の研究史に大きな礎を提供した小林（旧姓・関）コトさんは、川崎女性史編さん委員会編『多摩の流れにときを紡ぐ―別冊 聞書き集』（ぎょうせい、1990 年 11 月）に回想「陸軍登戸研究所でタイプを」を寄せている。41 年に満 16 歳で勤め始めて月給 16 円 30 銭を貰い、就職して少しするとタイピストの学校へ行かせて貰えるようになって（月謝、教材、交通費は自分もち）、通学のため 16 時には退勤できたという。ドキュメンタリー映画「陸軍登戸研究所」（楠山忠之監督、2012 年）でインタビューに応える横山サト子さんも、コトさん同様にタイピスト学校へ通ったと証言している。

登戸研に勤めた少女たちがほぼ異口同音に「戦争中だがすごく良い場所だった」と答えたことに明治大学平和教育登戸研究所資料館展示専門委員の渡辺賢二氏は驚いたという（講演「私の街から戦争がみえた――登戸研究所に勤務した少女との出会い」（同資料館『館報　6 号　2020 年度』））が、給料や処遇が良かったほか、研究所では運動会や遠足も実施され、明るい面もあったとのことである。

川崎市中原平和教育学級編『私の街から戦争が見えた――謀略秘密基地登戸研究所の謎を追う』（教育史料出版会、1989 年）にはインタビューや同学級が実施したアンケートに答えた元登戸研関係者の、入所当時の給料や仕事の内容に関する回答が複数掲載されており、なかには 19 歳で入職し月給 40 円を貰った女性の回答もあって、宮野薫さんの聞いた薙沢角江さんの証言を裏付けている。（続く）

シリーズ
禅寺丸柿の歴史 7

近代における川崎市域及び横浜市北部地域での果樹栽培(7)

相澤雅雄(都筑・橘樹研究会会員)

禅寺丸の江戸までの輸送手段

江戸時代に禅寺丸柿を江戸に運びこんだと言われているが、どんな輸送手段によったのであろうか。筆者は輸送手段についての史料を実見していない。そこで都筑郡及び橘樹郡における年貢米の廻米から類推してみた。一般的に江戸時代の物資輸送手段は舟運によって行われていた。年貢米は自村から陸路を行き、河岸から舟積みし運んでいる。当時の物資輸送手段から禅寺丸柿も舟運によって、江戸に搬入されたと推測した。そこで多摩川や鶴見川の河岸との関係から類推してみたい。例えば多摩川右岸の村々から運びだされた柿は、陸路を経て多摩川の河岸で舟積みし、多摩川を下って江戸湾にでて江戸へ運び込んだものと考えられる。五反田村(多摩区)や菅村(多摩区)は、江戸への年貢米の津出しを多摩川の河岸から積み込み、水運を使って蔵前に運び込んでいる。享保 10 年(1725)の「五反田村明細帳」や延享 3 年(1746)の「菅村明細帳」によると、両村とも年貢米を玉川河岸まで陸路で運び、その先玉川河岸で舟積みを行い、羽田村を経て浅草御蔵前まで運んでいる(『神奈川県史資料編 7 近世(4)))。鶴見川中流域の村々の津出しは、新羽村が末吉河岸から、吉田村が綱島河岸から、池辺村が川向河岸から、また川崎市域の木月村、小倉村、久末村、馬絹村の各村々も鶴見川の河岸を使っていた(『川崎市史通史編 2 近世』)。多摩川や鶴見川に発達していた舟運のことを考えれば、重量がある禅寺丸柿も村から陸路で河岸まで運び、その先は舟運で江戸へ運び込んだと考えるのが妥当であろう。舟運を使うことにより柿を傷めずに品質が保持でき、時間的にも陸路より短く輸送できる。

多摩川をゆく帆掛け舟　　筆者蔵

明治後期に入ると農商務省は、農村に対して「副業の奨励」を推進した。ここでいう副業は、江戸時代の農間余業とは異なり、農業の根幹である米づくりによる所得不足を補うために、草履、草鞋、縄、俵、莚、叺等の藁細工から家内工業まで、すべての農業生産によって収入増を図っていくことを奨励したものである。その種類は多彩であった。例えば明治 45 年(1912) 4 月調べの『都筑郡新田村治概要』では、村での生業として「主要ナル生業ハ専ラ農業ニシテ副業トシテ素麺及天然氷製造ヲ営ムモノ数十戸アリ、人皆勤勉ニシテ敢テ怠ルモノ殆ンドナシ」と、生業は農業であり寒中素麺と天然氷製造は副業であると位置づけている。さらに皆働き者が多いと評価している。

明治後期における農家の副業

明治 42 年(1909)に神奈川県農会は、県下の各村々における副業の実態調査を実施している(『神奈川県農会報　第 54 号』)。この結果から各村々で農家が収入増のために取り組んでいた副業の種類を明らかにできる。

柿生村では、炭焼、藁細工、槙切り、木挽、草葺屋根葺、馬力挽、春秋蚕、柿、養豚等の副業が行われていた。岡上村では春秋蚕、柿、栗が、中里村では炭焼、槙切り、藁細工、春秋蚕、柿、養豚が、田奈村では薪採り、落葉掻、炭焼、縄、草鞋、草履、莚俵、春秋蚕、柿、栗、養豚が、山内村では草鞋、莚、縄、春秋蚕、養蚕が、新治村では薪採り、炭焼、藁細工、春秋蚕、養豚と、村々では多種類の副業に取組んでいた。

概観すると橘樹郡では、藁細工、養蚕、梨・桃等の果樹栽培、日雇い労働を、丘陵地で雑木が多い村では炭焼、山仕事が行われていた。水田が多い村では、藁の産出が多いことから藁細工が多く行われた。藁細工は、農閑や雨の日あるいは夜なべ仕事として資本もいらず、まさに腕 1 本で稼げる仕事であった。朝食前に朝作りを行い、早めの夕食後は室内で夜なべ仕事に励んだ。特に多摩川沿岸では、新鮮で美味な稲毛桃・多摩川梨が消費者に賞味されていた。一方、柿生村や岡上村では、禅寺丸柿栽培を中心に炭焼・養蚕等が盛んであった。ここに明治末期における柿生村や岡上村等で行われていた副業の一端を紹介しておいた。　（続く）

シリーズ
歴史の中の女性像

その 1　ナイチンゲールの世界（14）

小林　基男（柿生郷土史料館専門委員）

クリミア戦争の終結と次なる課題へ

1855 年 9 月、1 年に亘って頑強に抵抗していたロシア軍のセヴァストポーリ要塞が、遂に陥落します。クリミアではロシアが敗北したのですが、直後に起きたロシアとオスマン帝国によるザカフカース（黒海とカスピ海に挟まれ地域、現在のジョージア、アルメニア、アゼルバイジャン 3 国の領域）の要衝、カルス要塞（現在のジョージアとトルコの国境地帯）を巡る攻防戦で、ロシア軍に包囲されたオスマン帝国軍が降伏したため、ロシアもまた敗者とは言えなくなったのです。

1854 年頃の撮影とされる
フローレンスの銀板写真

こうして、セヴァストポーリとカルスの戦闘の結果を受けて、対峙する両陣営の双方で厭戦気分が拡がり、休戦交渉に向けての下交渉が始まったのです。手始めに英仏両国は、クリミア派遣軍を半分以下に縮小し、ロシアもまた派遣軍を縮小したのです。しかし正規の休戦交渉の開始は遅れたため、戦闘はなくならず、両軍兵士の戦死や負傷、不衛生な環境による伝染病の発生は続いたのです。そのため現地に駐留する部隊は減っても、前線の野戦病院やスクターリの戦地病院の医師や看護士たちは、相変わらず多忙な日々を送っていたのです。体調が思うに任せないフローも、忙しく立ち働いていたのです。

そうした状況の中、イギリス本国でのフローの人気は、飛躍的な高まりを見せていました。「タイムズ」が伝えたランプを持ったレディの話は誇張でもなんでもなかった。本当だったのだと国中に広まったからです。戦場から戻った帰還兵たちが、負傷や伝染病で苦しんでいた時、ミス・ナイチンゲールにどれだけ力づけてもらったか、彼女のおかげで病院での待遇がどれだけ改善されたかを、戻った故郷で口々に語ったからです。噂は社交界にも届き、フローの母や姉もいまや時の人扱いを受けたのです。気の早い社交界は、帰国後のフローレンスの活動を支援しようと、ミス・ナイチンゲールがかねてから望んでいた看護士養成学校をすぐにでも開けるようにと、「ナイチンゲール基金」を創設して、募金集めを開始したのです。募金は各地から殺到し、短期間のうちに目標額を突破したのです。

スクターリのフローにも、本国での評判は聞こえてきます。ヴィクトリア女王からもフローの功績を称える高価な贈り物が届きました。そんな中、フローはさらなる病院の環境と闘病中の兵士の待遇改善のために、現地の司令官や本国政府の関係者などに提案や陳情の手紙を書き続けていたのです。兵士たちの命を救い、生活環境を改善することで、彼らが文字を覚え、自らの境遇を自ら変えていけるようになることを望んでいたのです。時間のかかった講和会議も、1856 年 3 月 30 日に平和条約が結ばれ、それから 1 ヶ月後の 4 月 29 日、戦争はようやく終わったのです。

戦争が終わっても、戦地の病院を直ちに閉じることはできません。闘病中の患者が全員退所するまで、閉鎖するわけには行かないのです。フローと共に最後まで残ったスタッフたちがスクターリを離れたのは、1856 年の 7 月 16 日のことでした。この時フローは、本国政府が用意した歓迎式典の開催を固辞し、自分がもっと頑張れば救えたに違いない大勢の兵士を死なせてしまったことの償いこそ、これから自分が真っ先にしなければならない仕事だと、覚悟を決めていたのです。彼女はスクターリから、「ナイチンゲール基金」の委員 1 人、1 人に、丁寧なお礼の手紙を送り、次のように記しました。「皆様のお申し出は大変有難いのですが、私が看護士養成の仕事に取り掛かるのは、かなり先のことになると思います。いつのことになるかは、まだ分かりません。私には、先にしなければならない仕事が残されているのです。」と。

フローは、8 月 7 日家族が夏を過ごすリーハースト荘にひっそりと帰還しました。出発前よりやせ細りすっかりやつれたフローの姿に両親も姉も驚き、2、3 ヶ月ゆっくり静養することを勧めました。しかし 36 歳になっていたフローは、思うに任せぬ体調から、自分の命は長くはないかもしれないと考え始めていたのでしょう。僅か一週間程の短い休息をとると、家族の勧めを振り切って各方面との折衝のためにロンドンに向かい、軍病院の衛生環境が良くなれば、大勢の兵士の生命を救えるからと、陸軍病院の衛生状態の改善に向けて動き出したのです。　（続く）

会告

シンポジウム 小島一也没後 10 年 ～ 今小島氏の業績を振り返る ～ を開催します

◆日時：11 月 17 日(日)13 時 30 分～16 時　◆会場：柿生中学校 2 階 視聴覚室(予定)

10 年前、2014 年（平成 26 年）12 月 5 日に 87 歳で逝去された小島一也氏は、2010 年（平成 22 年）11 月 20 日に開館した柿生郷土史料館の誕生に尽力され、初代の支援委員長として、史料館存続の基礎を築かれました。また機関誌『柿生文化』の常連執筆者として、健筆をふるわれる（その成果は、ご遺族の手で『麻生の歴史を探る』として、出版されました）傍ら、大著『麻生郷土歴史年表』を上梓されるなど、郷土愛溢れる書物を多数出版されました。

私どもは、小島氏の遺志を継ぎ、後代に引き継ぐべく、このシンポジウムを企画しました。皆様の積極的な参加をお願い致します。

◆ パネラー：小島澄人（柿の実幼稚園園長）、板倉敏郎（柿生郷土史料館初代館長）
新井 悟　（教育委員会文化財課学芸員）、外 1 名交渉中

◆ 司会進行：小林基男（柿生郷土史料館）

柿生郷土史料館友の会
第 15 回史跡見学バスの旅

横浜・横須賀巡り

～近代の幕開けと現代の日本を見つめる 1 日～

日時　2024 年 11 月 21 日（木）

集　　合：7 時 45 分　新百合丘駅北口（21 ビル前の歩道）
解　　散：18 時 30 分頃 新百合丘北口 その後柿生駅近く
募　　集：45 名　最低催行人数 30 名
参 加 費：11,500 円（昼食付き）
申し込み：往復はがきに参加者全員の住所、氏名、年齢、連絡先電話番号を記入の上、柿生郷土史料館まで、メールでの申し込みも可
主な見学先：三渓園、横須賀軍港めぐりと自衛艦見学、横浜開港記念館、赤レンガ倉庫

送付先：
〒215-0021 川崎市麻生区上麻生 6-40-1　柿生中学校内 柿生郷土史料館
メール送付先：
marat17930713@mail.fcservice.jp
申込締切：10 月 26 日（土）

問合せ先：小林基男 080-5513-5154　またはメール marat17930713@mail.fcservice.jp

柿生郷土史料館
第 94 回カルチャーセミナー

セイノカミ（どんど焼き）と地域文化

～岡上の事例を端緒として～

講 師：小関和弘氏
（柿生郷土史料館専門委員）
日 時：10 月 26 日(土)
13 時 30 分～15 時 30 分
会 場：柿生郷土史料館(柿生中学校内)特別展示室
参加費：無料。どなたでも参加できます。

岡上では現在、「岡上町内会」と「岡上西町内会」で「どんど焼き」を行っています。その歴史や現状を踏まえ、さらに全国各地の「どんど」にも目配りしながら、暮らしとセイノカミ（道祖神）、小正月の行事の社会的意味について考えます。ご参加の皆様から様々なご意見を頂きたいと思っています。

岡上西町会のどんど焼き 祠の組み立て作業

柿生郷土史料館 開館日のご案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日　：１０月５・１２・２６日（土曜日）　　１１月３・１７・２４日（日曜日）
◎開館時間：午前１０時～午後３時